

第 30 回国際軍事史学会大会参加報告

石 津 朋 之

2004（平成 16 年）年度の第 30 回国際軍事史学会大会は、7 月 31 日（土）から 8 月 7 日（土）までの間「大規模世界紛争を通してみた防衛の経済的側面」を共通テーマとして、モロッコの首都ラバト郊外にあるヒルトン・ホテルを会場に開催された。今年度大会の参加国は、ヨーロッパを中心に 25 カ国におよび、報告者はのべ 47 名にのぼった。

大会の運営は、モロッコ軍の全面的支援の下に行われ、モロッコ軍事史学会会長である B. アローブ中將はそのすべての行事に参加してホスト役を遺憾なく発揮していた。歓迎行事や支援業務などは、ほぼ軍の全面的協力によって行われたため、軍と軍事史研究の密接な関係が感じられた。大会 5 日目のエクスカージョン（見学）は古都フェズの見学やローマ時代の遺跡ヴォリュビリス見学が行われ、さらに、軍事博物館訪問やパラシュート部隊の降下見学、軍楽隊の演奏会などが研究会実施日の午後に行われており、まさに昼夜を問わない充実した大会 8 日間であった。

研究報告は、大会 3 日目の 8 月 2 日から、3 日、5 日そして 6 日の 4 日間にかけて、午前、午後を通して 2 つの会場に分け行われた。第 1 会場（トラック 1）、第 2 会場（トラック 2）ともに、ほぼ共通テーマである「大規模世界紛争を通してみた防衛の経済的側面」に即した発表が行われた。理論、歴史、そして事例研究と各セッションのサブ・テーマが示され、各セッションは 3 人の報告とそれに対する質疑応答という形で進められた。日本からの発表としては、3 日目（8 月 2 日）に名古屋商科大学の堅田義明教授による「国際経済協力から軍事拡張へ——1930 年代の戦争経済の意味に関する一考察」、6 日目（5 日）に当研究所の小野圭司主任研究官による「1904～1905 年の日露戦争に向けての軍事拡充動員のための日本の財政力」、及び 7 日目（6 日）に防衛大学校の荒川憲一助教授による「日中戦争の経済的結果 1937～41 年」が行なわれた。また、6 日目（5 日）には、筆者が午前第 1 会場の議長を務めた。

大会の日程は以下の通りである。

7 月 31 日（土）

受付

各種委員会

8月1日（日）

受付

各種委員会（筆者は議長団の事前打ち合わせ会議に出席）

ラバト市内見学

ウェルカム・レセプション

8月2日（月）

開会行事

トラック1（2セッション、6名報告）

歓迎夕食会

8月3日（火）

トラック1（2セッション、6名報告）

トラック2（2セッション、6名報告）

ラウンド・テーブル（1セッション、3名報告）

ムハンマド5世霊廟及び同博物館見学

歓迎夕食会

8月4日（水）

エクスカーション（フェズ及びヴォリュビリス）

8月5日（木）

トラック1（2セッション、6名報告）

トラック2（2セッション、6名報告）

カサブランカ及びハッサン2世モスク見学

歓迎夕食会

8月6日（金）

トラック1（2セッション、6名報告）

トラック2（2セッション、6名報告）

各種委員会

閉会行事

フェアウェル・ディナー

8月7日（土）

各種委員会（筆者は「ラウンド・テーブル」セッション準備委員会に出席）

各報告は、それぞれ発表国の歴史上の戦争及び軍事の問題と経済との関係を述べたものが主で、全体を通して、理論、歴史及び事例研究とこの問題の全体像を把握するよう意図

されていたと思われる。

2日の発表は、総じて概論的な報告が多かったが、そのなかでも堅田教授の報告「国際経済協力から軍事拡張へ——1930年代の戦争経済の意味に関する一考察」は、発表テーマの中心を日本におきつつも、当時の世界経済全般に対する目配りができていたという点で注目できるものであった。

この他に、筆者の関心を引いた研究報告としては、レイモンド・ルラーギ教授（イタリア）による「南北戦争において南部諸州はいかに戦争のための財源を確保したか 1861年～65年」、フレドリック・ゲルトン大佐（フランス）による「第一次世界大戦における経済情報」、そしてトム・クリスチャンセン教授（ノルウェー）による「第一次世界大戦、第二次世界大戦、そして冷戦におけるノルウェーの商船部隊」などが挙げられ、まさに研究報告全体を通して過去から現代までの戦争（軍事）と経済の関係についてさまざまな問題を考えさせられる会議であった。湾岸戦争やイラク戦争を見るまでもなく、今日、戦争（軍事）と経済の関係は国際政治の動向を決定付ける重要な要因となっている。国際軍事史学会における今回の諸研究報告は、今後の国際軍事情勢を考えるうえでも、そのケース・スタディーとして様々な含蓄を持った報告であった。

また、各国の軍事史研究に多大な影響を及ぼした文献を紹介する「ラウンド・テーブル」は極めて意義の大きいものであり、来年度以降は従来の1セッションに加え、新たに1セッションを設ける方向で調整が進められている。筆者は、来年度の「ラウンド・テーブル」の準備委員会委員の一人に任命された。

なお、来年度の第31回大会はスペインで、その後はドイツ、南アフリカの順で開催されるが、各国の軍事史研究者との交流の場として、また防衛研究所からの軍事史研究発信の場として、今後とも同大会への参加は有意義なものと思われる。

（防衛研究所戦史部主任研究官）